平成２４年度第２回野菜需給・価格情報委員会の概要

１　日時

平成２４年１１月６日（火）１３：３０～１５：３０

２　場所

独立行政法人農畜産業振興機構　南館１階会議室

３　概要

「平成２４年産夏秋野菜の需給・価格の実績」（資料１）の説明の後、秋冬野菜の需給・価格の見通しについて意見交換。その概要を藤島座長が取りまとめ、各委員に了承を得た上で、１１月１２日開催の平成２４年度第２回野菜需給協議会に報告することとなった。

（１）　消費分科会（１１月２日開催）に報告

①　景気、天候等の要因による消費動向

・夏は価格が安く、数量的に売れても金額ベースで低調であった。販売状況は今も厳しい。

・夏は暑くて小雨だったので、秋作は後れると見込んだが、予想に反して大豊作となり、単価安となっている。

・大型野菜が安値になると他の野菜も安くなる傾向があり、全体的に安値となっている。

・景気低迷が長期化しており、野菜消費についても当面厳しい状況が継続する。

②　震災や原発事故の影響による消費動向

・放射性物質による風評危害は以前よりは感じられない。ただし、一般消費者、業務用を問わず、まだこだわっている者が存在するので、併売や他産地のものでの対応をする必要もある。

・放射性物質が規制値以上検出された報道がときおりなされるきのこ類については、敏感にならざるを得ない。

・学校給食用では、小学校に福島産を納品しているが、まだ不安を口にする父兄もいる。また、保育園からは福島産の納品は遠慮してくれと言われることもある。

③　野菜全体の販売状況

・まとめ買いをする人が減っている。一回の買い物での一品目当たりの数量が小さい。

・売れる点数は変わらないので、野菜の売上が下がっている。

・夏のはくさいは売れない。店頭では１／８カット等でどうにか販売している。主たる需要先は浅漬けであるが、近年減少傾向である。

・八百屋においては、安い野菜を漬物にするといった一手間加えた加工品を売る

工夫をしている。

・消費者の買いやすさを考えて、例えば１か月といった長期間の売価を固定して、仕入値によって数量等を調整する取組みを行っている。

・有名な料理研究家にお願いして、簡単にできるレシピを作成し、コーナー化を含め関連野菜を併売している。

・大手食品メーカーとシーズンが始まる前に新商品について話し合いを行った上で、野菜の売り場で連携して提案している。

④　全体（主要６品目）の傾向

・今後は、豊作傾向で潤沢に出てくるので、安値になると思われる。

・レタスやキャベツは、業務筋から市場に買いが入らない場合、価格は高くならないと思われる。

⑤　冬キャベツ

・豊作で、価格が安く、産地も分散しているので、当面はこの傾向が続くと見ている。

・店頭においてメニュー提案がしやすい品目であるが、例年、これから冬にかけての季節は購入量がそれほど多くはない時期である。

⑥　秋冬だいこん

・１０月になり、ようやく売れ始めてきた。今後は売れる季節であるが、暖冬だと鍋商材の低迷、生育の良さによる豊作等、販売動向は厳しいと思われる。

・東北の産地に加え、今後は近在ものが出てくるが、豊作で価格が安く、当面はこの傾向が続くと見ている。

・サイズが大きくなるとカットをして販売せざるを得ないので、重量がさばけないのが心配である。

・業務用では、年間を通じてだいこんサラダの需要があり、需要は安定している。

⑦　たまねぎ

・１０月初旬から北海道産が潤沢に出てきており、安値となっており、しばらくはこの傾向が続くとみている。

・一定の輸入量が見込まれる中で、供給過剰になる可能性がある。

⑧　冬にんじん

・現在は北海道産が中心で、今後は千葉産も出てくるが、豊作で安値となっており、しばらくはこの傾向が続くと見ている。

・今夏は販売が厳しかったが、今も販売が厳しい状態で点数が売れていない。調理に手間のかかる野菜が敬遠されている影響ではないか。

・買いやすさとお得感を出すために、店頭では、ばら売りと袋売りをしている。

⑨　秋冬はくさい

・Ｏ－１５７による食中毒の影響などもあり、販売が厳しかったが、ここにきてやっと売れ始めてきた。今後は鍋物需要もあり、売れる時期である。

・茨城産が出てくる中で、まだ長野産が出荷されている状況であり、安値が継続

すると見ている。

・浅漬け、キムチ等の漬物の需要が落ちているので、需要は減少している。

・業務用では、外食等の１０月のメニュー替えにより、鍋物用等の需要が大きく増加する。

⑩　冬レタス

・季節的にはクリスマスの時期以外は徐々に売れなくなってくる時期である。

・業務用では、近年の価格高に対して、冬場の台湾産を手当てしており、年明けに台湾産が入ってくると、物がだぶつく可能性がある。

・暖冬であれば､サラダ食材としての需要は伸びていくのではないかと思われる。

⑪　その他（冬場の状況による影響等）の販売活動の動向

・暖冬になると、野菜が採れすぎて価格が下がる恐れがある。

・暖冬となると、だいこんやはくさいといった商品が売れなくなる一方で、きゅうりやトマト等のサラダ商材が売れるようになる。鍋物的な素材が売れなくなるため、他のメニュー提案をしていきたい。

・カット野菜は、順調に伸びている。これまでは野菜の価格の高騰時に売れていたが、安くなっても売れている。消費者が利便性に着目して使うようになったのでないか。

・外食では、厨房の人数が減り、調理技術が低下してきており、カット野菜のニーズが高まっている。

・単なるカット野菜から、例えばシーザーサラダ用のカット野菜等、用途ごとにバリエーションを増やすことにより、需要がさらに伸びる可能性がある。

・冷凍野菜は、例えば九州の国産野菜の工場では、冷凍オクラの品質が非常に良く、また、冷凍ほうれんそうは内外価格差が、これまでの５倍から２倍へと小さくなっている。国産の冷凍野菜を国としても推進すべきである。

・機能性が話題となったトマトは、そもそも売上がトップの商品である。これまではサラダ等生食での食べ方が中心であるが、トマト鍋等加熱調理での食べ方も登場しており、今後も期待している。

・こだわり野菜として、西洋野菜やミニ野菜に取り組む農家が増えており、直売所等において人気が出てきている。

・甘いピーマン等､今までと違った品目を取り扱ったところ､売り上げが伸びた。

・西日本で使われていた青ねぎが、関東でもうどんのチェーン店等で普及してきている。

・温野菜に期待しており、今後強化していきたい。

・たまねぎは、豪州産や米国産を扱うこともあるが、できれば国産を扱いたい。

・中国国内では､人件費が上がっていて､中国産たまねぎの魅力が薄れつつある。国内産はリレー出荷の体制を強化する必要がある。

・米国産のたまねぎは、今年の国内価格を見越して、これまでより安い価格を提案してきている。

・消費者や納品先に、一手間加えておいしく食べる工夫や、野菜の栄養等、消費者等が知らない情報を伝えることが重要であると考えている。
・野菜の消費を拡大するため、朝食で利用できるグリーンスムージーによるメニュー提案を行うことを検討していきたいが、効能をどうしたらうまく表示できるかが課題である。
・国産ブランドを使いたいと考えている人は多いので、直売所等を中心に、旬の野菜を食べるといった行動につながるような活動を進めたい。

（２）　秋冬野菜の需給・価格の見通しについての意見交換

秋冬野菜の品目ごとに、作付面積、生育状況の概要について説明があり、各委員から意見が出された。

①　冬キャベツ（１１～３月）

ア　作付面積・生育状況の概要

・作付面積は、千葉、愛知ともに前年比１００％、神奈川は春キャベツからの作型変更により面積が増加し、前年比１０９％。
・生育状況は、千葉は、夏場の猛暑の影響から生育は１～２週間程度の遅れとなったが、９月以降は適度な降雨があり、順調な生育で作柄は良好である。愛知は、台風１７号が上陸したが、その後の天候も良く影響は限定的となっている。神奈川は、病害虫の発生も少なく生育は順調である。

イ　各委員の意見

・夏から豊作のため、厳しい販売状況が続いている。今後も、期間を通して順調な出荷が見込まれることから、価格は、前年を下回って推移する見込み。
・消費が低迷している中で、１／２カット、１／４カットの購入が主体となっており、１個そのまま購入してもらうような提案が必要である。
・国内産地では、今後、加工・業務用業者との契約取引も重要となることから、国内での産地リレーを強化する必要がある。
・暖冬による前進出荷により年明け以降の出荷分が少なくなり、２～３月に端境期ができることが懸念される。
・加工・業務用については、本年は価格が安いので年内は国産で対応するが、近年、輸入品を取り扱っている業者は、本年も量的には少なくなるものの中国産及び韓国産を調達する見込み。

②　秋冬だいこん（１０～３月）

ア　作付面積・生育状況の概要

・作付面積は、神奈川と徳島は前年比１００％、千葉は生産者の高齢化による品目転換等により近年減少傾向になるが、一部地域で増加となるため前年比１００％。

・生育状況は、また、神奈川は、概ね順調。徳島は、台風１７号の影響が一部見られるが、大きな被害はない。また、年明け以降の播種比率がやや増加している。千葉は、８～９月上旬にかけての高温干ばつの影響から、播種作業に遅れがでたが、９月中旬以降は適度な降雨により、一部の産地を除いて生育は順調。１１月上旬以降の年内出荷は潤沢な出荷となる見込み。

イ　各委員の意見

・期間を通して概ね順調な出荷が見込まれることから、価格は、概ね前年を下回って推移する見込み。

・消費量も減少しており、スーパー等は来店回数を増やすために、１本売りでなく、カット売りをして販売点数を増やす傾向にある。

・前年の年末のように急に気温が低くなると肥大が進まず、歩留まりが悪くなることに加え、消費が伸びることから、価格が上昇する可能性もある。

・加工・業務用においては、市場外流通のウエイトが高くなっている。

③　たまねぎ（１１～３月）

ア　作付面積・生育状況の概要

・作付面積は、北海道は前年比１０３％（雹害による廃耕面積分を除く。）。

・生育状況は、北海道の極早生、早生は、４月下旬以降天候に恵まれ、順調な定植となった。干ばつ傾向で推移したが、概ね順調な天候から、平年作から豊作傾向である。中生、晩生は、５月上旬の降雨で定植作業が遅れ、生育期間が十分に確保されなかった圃場もあり、早生と比べると作柄は劣り、概ね平年作。

イ　各委員の意見

・国内産地の生育が順調で、期間を通して順調な出荷が見込まれることから、価格は、前年を下回って推移する見込み

・経済が低迷する中、産地は、価格維持のための消費拡大をどのようにしていくかを考える必要があるのではないか。

・加工・業務用においては、国産たまねぎの生育状況にかかわらず、輸入剥きたまねぎへの需要は根強い。

・今年は、中国産が不作であったことから、皮付きたまねぎの内外価格差は小さくなっている。

④　冬にんじん（１１～３月）

ア　作付面積・生育状況の概要

・作付面積は、千葉は前年比１００％、愛知は高齢化による面積減少のため、前年比９８％、長崎は前年比１０２％。

・生育状況は、千葉は、８月の豪雨で一部産地に発芽不良が見られた。その後、播き直しが行われ、概ね順調な生育状況で作柄は良好である。愛知は、台風が上陸したが、影響は限定的。長崎は、台風の影響により一部圃場で欠株等の被

害が見られたものの、適度な降雨もあり順調に生育している。

イ　各委員の意見

・豊作傾向でＬ、２Ｌ主体の入荷では、袋売りではなく、バラ売りが多くなり、単価が下がるため、販売は厳しい状況である。

・家計消費用はＭ～Ｌサイズ、加工・業務用は２Ｌ～３Ｌサイズが好まれることから、それぞれの需要に見合った生産を行う必要がある。

・外食等では、国内価格が高くなると輸入を手当てするようになるので、価格が高い時も契約を守ってくれる国内産地を育成していく必要がある。

⑤　秋冬はくさい（１０～３月）

ア　作付面積・生育状況の概要

・作付面積は、茨城は前年比１００％、愛知は高齢化、東三河のキャベツ・ブロッコリーへの転作等により、前年比９６％、兵庫は前年の高値を受け、作付面積が増加し、前年比１１２％。

・生育状況は、茨城は、夏場の干ばつによる生育遅れが懸念されていたが、その後好天が続き、適度な降雨もあったため、生育は回復してきている。愛知は、台風の影響は少なく、天候に恵まれ、生育は順調。兵庫は、台風等の影響を受けている圃場があるが、時期が進むにつれ影響は少なくなっていく。

イ　各委員の意見

・１１～１２月にかけては、昨年は気温が高く安価であったことから、価格は、前年を上回ると見込まれるが、１月以降は、前年を下回る見込み。

・Ｏ－１５７による食中毒の影響により、漬物需要が減少しており、今後も尾を引く可能性がある。

・１１月の気温が低くなると、２月以降の出荷量が減少し、価格が上がる可能性がある。

・加工・業務用の現場でも１個使用せず、１／４にカットしたものを納める場合もある。

⑥　冬レタス（１１～３月）

ア　作付面積・生育状況の概要

・作付面積は、茨城は前年比１０２％、静岡は前年比１００％、兵庫は前年比９９％、香川は、生産者数の減少等により前年比９６％。

・生育状況は、茨城は、定植作業が遅れていたが、９月上旬以降に適度な降雨があり、遅れていた定植作業も一気に進み生育も回復した。静岡は、干ばつ・高温の影響で多少遅れが見られる程度であり、生育は順調。兵庫は、出荷時期の早いもので、台風等の影響を受けている圃場があるが、時期が進むにつれ影響は少なくなっていく。香川は、初期の露地栽培の作型は、台風と降雨により定植は進んでいない。次のトンネル栽培の作型は順次播種が進んでいる。

イ　各委員の意見

・期間を通して概ね順調な出荷が見込まれることから、価格は、１１月を除き前年を下回って推移する見込み。１１月は、昨年は安値だったことから、前年を上回る見込み。
・九州の加工・業務用向け産地の作柄次第で、価格が上昇する可能性がある。
・加工・業務用では、米国や台湾から一定量の輸入がある見込み。
・天候に大きく左右される品目であることから、天候次第で価格が変動する可能性がある。